



南九州

文学の小径

46

廣尾 理世子

鹿屋市浜田町の「かのやばら園」は、プロポーズにふさわしいロマンチックな場所として、全国の観光地の中から「恋人の聖地」に選定されている。色とりどりのイングリッシュローズに囲まれたローズチャペルでは挙式もできる。

その「かのやばら園」から6*ほど離れた場所にあるのが、海上自衛隊鹿屋航空基地。戦前から使われている航空基地で、かつては特別攻撃隊の出撃基地でもあった。柳田邦男のノンフィクション「零戦燃ゆ」や百田尚樹の小説「永遠の0」の舞台にもなっている。現在、資料館には海上自衛隊の歴史資料に加え、鹿屋航空基地から飛び立った特攻隊員たちの膨大な遺書や写真が展示されている。二代目「水戸黄門」で知られる俳優・西村晃や、裏千家前家元・千玄室も、特攻隊員としてここに配属されていた。

直木賞作家・角田光代は、その特攻隊の記憶と「恋人の聖地」とを結びつけて不思議な味わいの短編小説を作り上げた。恋愛小説アンソロジー『あの街で二人は』の二編「その、すこやかに」ならぬときも」である。三十

特攻の記憶 バラに重ね

代後半の「私」が、ふとしたことから鹿屋を訪れ、特攻隊員であった大叔父の存在を知り、戦中の若者の生に思いを馳せる。という構成は「永遠の0」と同様だが、角田は視点人物である「私」に夫に裏切られた妻という設定を与え、特攻隊員と勤労女学生の純愛について、皮肉な感慨を抱かせる。二人の恋は一瞬だけのものだったからこそ、美化できたのだ、と。夫との結婚生活が破れかけている「私」は、現在の自分の不幸と絶望で

鹿屋市職員の説明を受けながら、かのやばら園を巡る角田光代さん(左)
=2013年、鹿屋市

手一杯なのだ。

そんな「私」の心を変えたのが二つの光景である。一つは資料館に展示されていた遺書や手紙。もう一つはローズチャペルで行われる見知らぬカップルの結婚式。祝福を受ける花婿と花嫁の姿を見ながら、いつしか「私」は、結ばれなかった大叔父とその恋人を「ずっと長くともいさせてあげたかった」と考えるようになる。結婚生活を共に歩めば、相手を憎み、怒り、絶望する時間もあつただろう。「そんなことに、二人を立ち向かわせてあげたかった」と同時に、「私」自身も、自らの生活を再生させるべく、ある決断を下す。

散りゆく桜にたとえられる特攻隊だが、角田は、彼らの失われた生と、あり得たかもしれないその後の人生を、ばらの花に重ね合わせる。戦時下の特攻の記憶と、平和な時代の「恋人の聖地」が共存する鹿屋。この街には、ばらの花がよく似合う。

(鹿児島純心女子高教諭)

角田光代「その、すこやかに」
『小説新潮』2013年12月号)▽柳田邦男著「零戦燃ゆ 渾身編」(1990年9月 文芸春秋)▽百田尚樹著「永遠の0」(2006年8月 太田出版)

